

「臨牀透析」40年を振り返って

市川 和子*

私が管理栄養士になって40数年が経過した。ふと私は、この雑誌と同じ月日を共に歩んできたのかと感慨深く思う次第である。この40年で透析技術は素晴らしく進歩し、透析患者が長生きできるようになってきた。40年前の透析患者は40～50代の方が多く、とくに夜間透析の患者の食べすぎの栄養指導が主流であった。腎性貧血の治療もこれといったものがなく、輸血や鉄の投与がなされていた。そこへ1989年にはrHuEPOが開発され腎性貧血の著しい改善を目の当たりにし、今やHIF-PH阻害薬による貧血の治療が行われている。また、骨代謝に関しても高リン血症が長い間問題となり、リン吸着薬をめぐってさまざまな薬剤が開発された。カリウムに関してもイオン交換樹脂を主とした吸着薬による治療が中心であったが、最近では非ポリマー無機陽イオン交換化合物が開発されてきている。このように薬剤の開発により透析患者の食事療法も大きく様変わりしてきた。厳しい制限食から少しでも解放され制限の少ない自由度の高い食事への願望がうかがえる。しかし、最近では透析患者の高齢化により食が細くなり低栄養が大きな問題となってきた。今までの制限食から一変して、少しでもいいので栄養価の高い食事の提供が求められるようになってきた。この40年で透析患者における食事療法は大きく変わってきた。今後も私共管理栄養士は時代の変化と共に少しでも患者に寄り添った食事の在り方を模索していきたいと考えている。

* おさふねクリニック